

欲生心の象徴的自覚

9

本多弘之

bonda hiroyuki

親鸞は、「信巻」の欲生心釈に「欲生成就の文」と名づけて、本願成就文の「至心回向」以下の文を引用し、異訳『如来会』の相当部分を引いた後、『論註』の「起観生信章」の回向門釈を引用して、本願成就文の「至心回向」が『浄土論』の「回向門」に照らして如来の回向であることを示している。これによって、本願の三心における欲生心は如来の

「回向心」であると示す根拠が、『浄土論』の回向門にあることが明らかとなる。

如来の回向としての欲生心とは、人間存在の根底に呼びかける一実真如からの招喚であるとされる。換言すれば、迷没の凡夫が帰るべき本来の在り方から、常に本来に帰れと呼ばれているということである。けれども、流転の状態にある人間には、その本来性からの

呼び声はまったく自覚されない。この欲生は、日常的な意識上のぼる意欲ではないということである。法蔵願心が十方衆生に呼びかける欲生心は、存在の本来への呼びかけであり、人間存在の深層の欲求とも言うべき意欲なのである。

一般的に言う意欲とは、未来への希望を孕んだ心理である。日常的な意識に起こる意欲



は、日常的な濁世のなかから未来への何らかの変更を要求する意識作用であろう。一如真実からすれば、その濁世の情況の変更ないし変革は、流転の闇のなかのまがきのようなものである。存在の本来への方向は、流転のレベルの情況変更ではないから、日常意識からは見当がつかない。いわば、次元が異なるのである。この日常性から次元の突破を呼びかけるのが、経の「超発」という表現であろう。親鸞はその超について、日常レベルを突破しようという意欲が人間から起こる質を「豎」と表現し、人間から起こるのでなく真実の側から人間に呼びかける方向で起こってくることを、「横」と表現する。その意味で、横から発起する意欲を「横超の菩提心」と言う。横超は人間から流転の日常次元を突破するのではないから、人間は煩惱具足の身のままでありながら、如来の智慧の光明のなかに呼び戻されることを表そうとする。

如来回向の欲生心とは、この横超の意欲が、十方衆生に必ず気づきをもたらそうとはたらいっていることを表すのである。われら衆生は、本来の存在の真理のなかにありながら、迷妄の意識に覆われて、真理を自覚することができない。だから愚凡であると自己を表出するしかない。しかし、その本来性それ自身が黙ってみているのでなく、本来へ帰れと叫んでいることが、われらには、自己の現実に不満

を感じたり、社会の不条理や情況の不平等に腹立ちを覚えたりするというかたちで、現実からの変革を呼びかけられているとも言えるのである。

ただし、人間に自覚される限りは日常レベルでの変革への意欲のごとく起こるから、そのままそれを自分から意欲するなら、「豎」の突破を意欲することになる。『浄土論』の回向門を注釈する曇鸞は、ここに「往相回向」と「還相回向」という言葉を出している。天親菩薩の『浄土論』では、回向門の行を因として、果の第五功德門すなわち「園林遊戯地門」を成就することになっている。この回向門の因果は、菩薩行の自利利他の因果のなかの利他の因果である。その回向門に「回向を首として大悲心を成就」と天親菩薩が言うところに、親鸞は小慈小悲の衆生の分限ではないことに気づいて、法蔵願心の回向の因果を、曇鸞が「二種回向」と言うのどと見られたのであろう。「横」の願心が衆生の本来性への還帰の方向を、一方向ではなく往還として示すのである、と。

この如来の欲生心は、大乘の至極の「大涅槃」への方向と、如来の大悲心が涅槃から煩惱世界にはたらき出て衆生を仏道に入らしめる方向という二方向ではたらくと言うのである。この二方向を如来の回向の意欲として衆生にはたらこうというのである。まさに「不

住生死・不着涅槃」の大乘の正覚を法蔵願心のはたらきに具現するということである。この大乘仏教の大涅槃を基軸とする菩提心の二方向を、「欲生心」として衆生のうえに成就すると親鸞は言う。しかしこの如来回向の欲生心の内実を、衆生は云何にして自覚することができるのであろうか。

横超の願心と値遇するとは、凡心がそのまま肯定されるのではなく、凡心の延長上に理想が成就されることもあるまい。言うまでもなく、凡心のなかに、大悲心を取り込むことでもない。如来回向に値遇することを、如来の手助けを受けて、凡心が菩薩道を成就することができるようになると誤解する向きも多い。そうでないとすると、如来の回向が凡夫に成就するとは如何なる事態であらうか。

小慈小悲を大悲に照らし出されるとは、凡心の即自的肯定でもなく、単なるその否定でもないであらう。大悲心が名号に自己を託してわれらに呼びかけることを信受するとき、相対的な有限性を知らしめられつつ、われらは有限の分限を尽くして、大悲の一切衆生への包摂があることを信じていくと言うことなのではないか。眞実信心には、「願作仏心即度衆生心」という意味が、法蔵願心の見えざるはたらきとして内包されているというのである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長
近著に「新講 教行信証」行巻6「樹心社